

近代英語協会第 39 回大会

Zoom コンファレンス

—— シンポジウム・研究発表 ——

開催日 : 2022 年 8 月 20 日 (土)

会場 : 近代英語協会公式ホームページ内の特設サイト

[<http://www.modernenglish.jp/>]

近代英語協会事務局分室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12

愛知学院大学文学部英語英米文化学科 前田満研究室内

電話 : 0561-73-1111 (代) FAX : 0561-73-81790

会費振込口座 00810-9-5821

「コーパスデータによる言語現象の掘り起こし」

司会・講師：塚本 聡 (日本大学教授)
講師：山本史歩子 (青山学院大学教授)
講師：山崎 聡 (千葉商科大学教授)

シンポジウム趣意

日本大学教授 塚本 聡

母語話者が存在しない通時的言語研究にコーパスは不可欠となっている。OED が定義するように「コーパス」という語にはテキストの集合体という広義の意味がある。コンピューターが存在しない時代の英語史研究は多くが手作業により（目視が中心的）、広義のコーパスを用い、当該の構文等を調査するという手法が基本的な研究手法であった。一方、現在「コーパス」といえばコンピューター利用のコーパスをさすことが普通となっている。Corpus Resource Database (CoRD) (<https://varieng.helsinki.fi/CoRD/>) を見ても昨今の史的コーパスの充実ぶりは明らかである。比較的狭い範囲のテキストを対象にした手作業（目視）による資料収集とは異なり、コーパス利用の言語研究は量の大幅な拡大が最大の特徴となるであろう。このような量的拡大により、今までは観察されにくかった言語現象に光を当てる研究も可能になる。

しかし、このような量的に拡大されたコーパス使用の言語研究が適用しにくい研究分野も存在する。また、コーパスに依存するゆえに見落とされてしまう現象もありうる。本シンポジウムでは、コーパスを活用して、動詞の補文構造の変化、強調の効果をもつ遂行文の変化、言語変化の速度変化に関わる言語現象の掘り起こしを試みる中で、コーパス利用による言語研究に伴う諸々の困難や問題点についても触れたい。

「後期近代英語における動詞の補文構造の変化を追う—ARCHER Corpus および COHA に基づく検証」

青山学院大学教授 山本史歩子

1960年代に編纂された世界最古の電子コーパスである Brown Corpus の登場以来、電子コーパスは急速な発達を遂げ、我々研究者は、データ収集にかかる時間と労力から解放され

た。また、電子コーパスの資料は様々なジャンルからバランスよく収集されており、電子コーパスに基づく研究結果は一定の信頼性を得ている。しかしながら、一方で、例文だけを抽出する電子コーパスに基づく研究は意味や機能の解釈の妥当性において、様々な問題点が指摘されている。

本発表は、ARCHER Corpus と COHA を使用して、コーパス研究の検証を行う。具体的には、後期近代英語における動詞の補文構造の変化を追う。これらのような形式変化を追う研究は、電子コーパスの真価を発揮する良い機会と言える。次に、COHA を使用して、同様に動詞の補文構造の変化を分析し、両コーパスの分析結果を踏まえつつ、汎用性電子コーパスが抱える問題について考察する。

「I tell you 等の強調の効果をもつ遂行文の変化を追う」

千葉商科大学教授 山崎 聡

Culpeper and Haugh (2014: 159f.) は、初期近代英語期では I thank you, I warrant you, I assure you, I beseech you のような明示的遂行文がよく使われたが、それらは現代英語では I assure you 以外は衰退したことに触れている。一方で、Kohnen (2015) は、主語の一人称の I だけを検索語に指定することで、15 世紀末、17 世紀末、19 世紀末の 3 つの時期のコーパス中の遂行動詞を抽出している。それによると、遂行文は一様に減少したわけではなく、commissives や directives では減少が顕著な一方で、expressives はほぼ一定で、representatives も調査に用いたテキストの特性を考慮すると、近代英語期の間大きな変化はないことを示唆している。

Representative の遂行文は、これまであまり取り上げられなかったと考えられる(cf. Kohnen, 2015: 72) が、本発表では、主に CLMET 3.0 と The Movie Corpus の UK/IE のサブコーパスを用いて、I tell you, I assure you, I swear, I promise you の (後期) 近代英語から現代英語にかけての変化を追う。これら 4 つの遂行文は、共に多かれ少なかれ「補文」の命題を強調ないしは断定する働きをもつ (OED 3) と言えようが、この間の 4 つの遂行文とそのヘッジタイプの出現状況は異なり、その通時的変化の掘り起こしを試みる。また、コーパスによるデータ収集に関して、作家による偏りに起因するコーパスの代表性の問題にも触れたい。

「コーパスデータで言語変化の速度変化を追う」

日本大学教授 塚本 聡

通時的な言語学では、時系列の言語変化を扱うことが多い。言語変化は一般に S 字状の増加 (あるいは減少) 現象を示すといわれている。Denison (1999) が説明するように、変化は、

当初少数の生起から始まり、伝播・拡大し、変化が定着した後、収束に向けて変化速度が減少し、一定の生起数に定着するという説明は概念的には合理性があるものといえる。たしかに Ellegård (1953) の do の使用の増加では S 字状の増加のように見える。

しかし、現代のようにコーパスが充実していない段階で示されたこれらの説明ではあくまでも概念としての説明原理といえるかもしれない。本発表では、英語史上の顕著な変化を取り上げ、コーパスデータで変化の度合いを検証し、必ずしも多くの変化では S 字状変化ではないことを示すことを目標とする。

具体的には、PPCEME, PPCMBE2, COHA を用い、完了形と共起する助動詞、関係詞、be+ing (進行相)、動詞補部の動名詞 (-ing) の生起数などを例に変化の速度変化を提示する。変化の検証に加え、コーパスデザインの問題点についても言及する。

参考文献

Culpeper, Jonathan and Michael Haugh (2014) *Pragmatics and the English Language*, Palgrave Macmillan, London.

Denison, David (1999) ‘Slow, Slow, Quick, Quick, Slow: The Dance of Language Change?’, in Ana Bringas López et al., eds., *Woonderous Ængilssce’: SELIM Studies in Medieval English Language*, Universidade de Vigo, Vigo, 51-64.

Ellegård, Alvar. (1953) *The Auxiliary Do: The Establishment and Regulation of Its Use in English*, Almqvist & Wiksell, Stockholm.

Kohnen, Thomas (2015) “Speech Acts: A Diachronic Perspective,” in Karin Aijmer and Christoph Rühlemann, eds., *Corpus Pragmatics: A Handbook*, Cambridge University Press, Cambridge, 52-83.

研究発表 第一部 13:20—15:30

司会 今林 修 (広島大学)

1. 「計量文体論手法による Tennyson の文体における語彙特徴一考」

大阪大学大学院生 藤田 郁

本研究は、ヴィクトリア朝の詩人 Alfred Tennyson の文体を、計量文体学の手法の一つ、潜在的ディリクレ配分法 (Blei et al. (2003); 以下 LDA) を用いて分析し、その結果に質的考察を行うことで Tennyson の文体特徴を明らかにすることを目的とする。

LDA は、テキストにおける複数の潜在的なトピック (何らかの意味的つながりを持ち得る

語の集合) を発見する機械学習モデルである。LDA の最大の利点は、従来の計量文体学などで敬遠されてきた「意味の問題」にアプローチすることが可能になったことであるが、LDA を用いた韻文作品研究の例は未だ少なく、これまで多くなされてきた Tennyson の作品研究も例外ではない。

Tennyson の作品や文体研究では、他作家からの引喩等、他作家との類似点が数多く指摘されている。本研究では語レベルに焦点をあて、計量的手法から得る客観的データに詳細な質的考察を行うことで、これまでと異なるアプローチにより、作品や文体が他作家のそれと類似している中でも、Tennyson の作品や文体と他作家のそれを区別し、特徴となる要素を提示する。

参考文献

Blei, M. D., Ng, Y. A., and Jordan, I. M. (2003) “Latent Dirichlet Allocation,” *Journal of Machine Learning Research* 3, 993-1022.

2. 「初期近代期における個人言語の多様性: John Donne と Lancelot Andrewes の形態・統語的要素の分析」

熊本学園大学講師 矢富 弘

初期近代期には三人称単数語尾の *-th* から *-s* への交替や、二人称単数代名詞 *thou* の衰退などの大きな言語変化があったが、保守的とされる宗教ジャンルのテキストでは変化の速度が遅く、ジャンルを特徴付ける「社会的意味」を獲得することで古めかしい表現が保持された。宗教ジャンルの担い手である宗教家の中にも、先進的・保守的な言語使用者が観察されるが、彼らの個人言語の多様性についての議論は不足している。

本発表では、初期近代期の代表的な宗教家である John Donne と Lancelot Andrewes の個人言語に焦点を当て、ジャンルや年代によって言語使用に変化が見られるかを調査する。John Donne は説教文のみならず手紙や詩といった多様なジャンルのテキストを残しており、Lancelot Andrewes は 1605 年から 1623 年に至るまでの説教文を多数残している。これらのテキストにおける言語使用を比較することで、個人言語の多様性を記述し言語変化との関連性を議論するとともに、個人言語の分析における注意点を提示することを目指したい。

司会 大野英志 (広島大学)

3. 「Samuel Johnson による書簡の言語について」

広島修道大学教授 水野和穂

本発表は、Samuel Johnson の言語的アイデンティティについて、彼の書簡の言語を分析することにより考察を試みるものである。従来の Johnson の言語、文体研究では、*The Rambler* (1750-52), *A Dictionary of the English Language* (1755) 等を一次資料として彼の言語観や言語使用が検討されることが一般的であり、Johnson の informal な言語についてはほとんど関心が向けられることはなかった。

発表では、まず、Johnson の書簡言語の先行研究である Bax (2000) 及び Sario (2005) に言及しつつ、私的書簡に表れる文通相手に対する言語的関与の度合いにより、Johnson の社会的ネットワークについて検討する。続いて、特定された近しい文通相手への書簡の言語に注目し、彼の informal な言語特徴を示すことによって Johnson の言語使用の新たな側面を提示できればと思う。

参考文献

Bax, R. C. (2000) 'A Network Strength Scale for the Study of Eighteenth-century English,' *European Journal of English Studies* 4 (3), 277-89.

Sairio, A. (2005) 'Sam of Streatham Park: A Linguistic Study of Dr. Johnson's Membership in the Thrale family,' *European Journal of English Studies* 9 (1), 21-35.

■ 研究発表 第二部 15:40—17:50

司会 野村忠央 (文教大学)

1. 「19世紀における再帰代名詞への主語の働きかけの希薄化について:英語の *V oneself down* 構文を例として」

日本工業大学准教授 市川泰弘

中村 (2004) は再帰代名詞が目的語として生じる構文を再帰構文と再帰中間構文に分け、再帰構文から再帰中間構文が「主語の再帰代名詞への働きかけの希薄化」によって線状に派生していくと述べている。

(1) a. John stabbed himself.

b. John dressed himself.

c. John pricked himself on a needle.

d. John hurt himself in the game.

e. The bag opened itself.

f. The sun showed itself.

(中村 (2004:142))

この現象により再帰代名詞の認知構造の意味が消失していき、結果として再帰代名詞が消失した構文が生じると論じている。本発表では‘V + oneself + down’構文において19世紀に再帰代名詞の希薄化現象が存在するのか、存在した場合、上述の派生と同じ派生なのか、その一部なのかを明らかにしたい。

参考文献

Ichikawa, Y. (2017) *Study on Constructions with English Verb Get: Reflexive Pronouns and the Attenuation of Subject NP's Force*, Doctoral Dissertation, Kanazawa University.

Kajita, M. (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," in M. Ukaji et al., eds., *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, Taishukan, Tokyo, 377-393.

中村芳久 (2001) 「二重目的語構文の認知構造-構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例」、山梨正明 (編)、『認知言語学論考』第1巻、ひつじ書房、東京、59-110.

中村芳久 (2004) 「行為連鎖と構文Ⅲ：再帰中間構文」、中村芳久 (編)、『認知文法論Ⅱ』、大修館、東京、37-168.

2. 「Way 構文における形容詞修飾に関する通時的考察」

高知県立大学准教授 金澤俊吾

英語における Way 構文の通時的研究は、Israel (1996) や Traugott and Trousdale (2013), Perek (2018), Fanego (2019) らによって行われ、生起する動詞の分布の変遷に注目することで、当該構文の通時的变化が説明されている。

Way 構文には、形容詞が随意的に生起し、way を修飾することで、移動動作の様態を表すことができる。この詳細は、Goldberg (1995) と Jackendoff (1990) によって説明されており、具体例として、one's familiar/own/noisy/weary way (Goldberg (1995)) や、one's miserable/insidious/ponderous way (Jackendoff (1990)) が挙げられている。実際のところ、これ以外にも、difficult や laborious, lonely, tortuous などの形容詞や、plodding などの現在分詞が way を修飾する事例が存在する。

本発表では、Way 構文における形容詞修飾に注目し、その意味的特徴から、当該構文の通

時的变化を考察する。具体的には、Corpus of Historical American English (COHA; Davies (2010)) を用いて形容詞修飾を調査し、年代毎に整理することで、使用される形容詞の分布の変遷を観察する。その上で、多様な形容詞が way を修飾するメカニズムに関して、共起する動詞との意味的關係と、way の語彙的多義性の観点から考察する。

参考文献

- Davies, Mark (2010) *The Corpus of Historical American English (COHA)* (<https://www.english-corpora.org/coha/>).
- Fanego, Teresa (2019) “A Construction of Independent Means: The History of the *Way* Construction Revisited,” *English Language and Linguistics* 23 (3), 671-699.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Israel, Michael (1996) “The *Way* Constructions Grow,” in Adele E. Goldberg, ed., *Conceptual Structure, Discourse and Language*, CSLI Publications, Stanford, 217-230.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge.
- Perek, Florent (2016) “Recent Change in the Productivity and Schematicity of the *Way*-Construction: A Distributional Semantic Analysis,” *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* 14 (1), 65-97.
- Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Changes*, Oxford University Press, Oxford.

司会 松原史典 (京都女子大学)

3. 「チャールズ一世の裁判記録における時空間体系」

浜松医科大学教授 中安美奈子

法政大学教授 椎名美智

本研究の目的は、チャールズ一世の裁判記録における時空間体系を歴史語用論的な観点から体系的に分析することである。話者は自分の領域と事象との距離を測りながら、代名詞や時制等の、近称または遠称の時空間の要素を選択する。また、談話において、こういった要素を一致させて近称または遠称の視点を構成したり、これらの視点を交替させたりする。

本発表では、まず量的な分析を行い、近称または遠称のどちらの要素がより多く選択されるのかを示す。最も重要な対話者である裁判官と被告とを比較すると、それぞれが考える権

威のありかが時空間体系に反映されているのがわかる。談話に関する質的な分析においては、近称または遠称のいずれの視点を取りやすいのか、また、どのように視点は交替されるのかを明らかにする。このような交替は、空間のみ、時間のみ、あるいは統合された時空間の中で起こる。判決が近づくと、視点の交替は速くなることも指摘する。

■ 特別講演 18:00—19:00

司会 中尾佳行（広島大学名誉教授）

“Ah, you are a travelling scholar! — Verbs of Motion in Medieval English”

千葉大学名誉教授 小倉美知子

Only a few patterns of linguistic changes have been attested among the verbs of motion in the history of English. Basic verbs of motion such as *come* and *go* are not likely to be influenced or replaced by loan verbs, but one of the main senses which OE *cuman* and *gan* had are succeeded by a loan verb *arrive* or by a once infrequent native verb *walk*. Prefixed verbs like *ingan* and *utgan* shifted to verb-adverb combinations like *go in* and *go out*, but the replacement has also been made by a loan verb like *enter*. *Becuman* survived and succeeded an old sense of *cuman*, while *fundian*, *fysan*, *liðan* and *gewītan* became obsolete. *Faran* and *feran* merged morphologically and semantically, experiencing semantic changes.

In this lecture I focus on variant forms of verbs of motion chosen in the same or similar context, especially in Lindisfarne, Rushworth (1&2) and West Saxon Gospels, *Lazamon's Brut* and *Cursor Mundi*, add some notable examples from Old and Middle English texts, and see how writers and readers in the medieval period both suffered and enjoyed a variety of expressions.